

⑥ 大井神社祭神百田大兄命について



大井神社は、「鐘」に刻まれた河田王彦宮司の詞からも鎌倉時代の正元元年（1259）に創建されたことがわかりました。では、それまでこの地では「おがむこと」は何もされていなかったのでしょうか。

日本列島最古の水田が北部九州（唐津市・福岡市）で発見され、水稻農耕が紀元前400年～500年には始まっていたことがわかりました。

この技術が岡山まで伝わり、現在、吉備最古の水田遺跡とされているのが岡山市津島の江

道遺跡（市内北区岡北中学校地）です。旭川添いの微高地に基盤土を掘り起こして作られた



岡山市津島江道遺跡

1区画平均3m×5m前後の給水型水田です。これが、この地方での一般的なものと考えられています。

一方、水稻農耕開始から700年ほど後の西暦250年頃、ヤマタイ国ヒミコの時代に農業神の崇拝が始まりました。

さて、どんな形で始まったのでしょうか。

郷土史家の薬師寺慎一さんは、古いお宮では、頭の中で社殿を取り払った後、境内に何が残るか観察するそうです。昔「社殿」はなかったはずだと考えるからです。すると、山、岩、古墳などが残ると言います。つまり、山や岩を拝んでいたものが、寺院建築の影響で神祭の場に社殿が建ち、その中に御神体（鏡・剣・玉・神像）が置かれると、神様は、常に社殿の中に居るという考えになり、次第に、神が宿るものであった山、岩などのことが忘れられたのが現在の神社の姿だと言います。

大井神社に当てはめるとどうでしょう。前頁の写真を御覧ください。足守川と日近川に挟まれた宮山の頂きに多数の古墳（宮山古墳群18基）があります。

ここに集落グループのボス、つまり百田大兄命が葬られ、祀られているのではないかと思うのです。

では、果たして何の神様であったのでしょうか。武家政治が始まった鎌倉時代に創建されたということですが、娘の百田弓矢媛は吉備津彦命の妃という古い由緒を証明する神様です。



鍛冶山西麓鍛冶屋辺りの弥生集落復元模型

吉備郡神社誌（大正5年岡山県神職会吉備郡支部）には、温羅との戦の後は殖産興業に努めたとあります。既に、稲を作り米を主食とするようになり水田の経営は生きていく上での根本となっていたはずです。百田大兄命とは、山間に土地をならし、小さいながらもその名



山間の棚田

のとおりたくさん田を残してくれた先霊に対し、尊崇の念をこめて贈った名。つまり、豊年満作を祈る神様ではなかったのでしょうか。そしてこのことは、正元元年に初めて始まったものではなく、幾たびもの冷害や干魃等による悲惨な体験を通じ、祭礼としての体裁を整えながら、ヒミコからさして下らぬ時代から大

井宮山の古墳の前で続けられていたのではないのでしょうか。